

○ 最近の活動状況

➤ 8月12日(月)～17日(土)

在福岡ラオス人民民主共和国名誉領事館中島名誉領事、前田補佐官他がヴィエンチャンを訪問。医療センター建設構想について現地にて打ち合わせを行いました。

➤ 8月20日(火)

平成25年度第1回役員会を開催

- ・今後のラオス友好協会の進め方について協議(ビジネスと交流のあり方について)
- ・NPO ”ラオスのこども”に図書室・図書の寄贈を決定(20万円を送金)
- ・”ダルニープレート”年1万円で1人の子供を学校に“の支援を活発に。
 - ・平成26年2月中旬 第2回目のラオス訪問団の派遣を決定。

➤ 9月4日(水)

ラオス人民民主共和国計画投資省投資促進局国際投資協力部長 ポンタヴォン シンハラット氏が来福。(UNIDO 壽(としなが)郁恵氏同行)

- ・国際連合工業開発機関(UNIDO)事業にて来日
- ・横浜、名古屋にてラオス投資セミナー実施
- ・在福ラオス名誉領事館の活動、及び福岡・ラオス友好協会設立の経緯、事業概要、ラオス訪問団等について説明を行いました。



○お願い 皆さんの廻りの方にラオス友好協会入会を勧めてくれませんか。又行き違いの場合は失礼しますが会費の納入についてもご協力ください。



ラオスってどんな国？ (出典:ラオス情報文化観光省)

ラオスってどんな国？と問われても答えに困ってしまう。アンコールワットのように壮大な遺跡があるわけなし。エメラルドグリーンの海が広がっているわけでもない。タイのトムヤンクンのような名の知れた料理があるわけでもない。

What's Laos!

全長4,350km、チベット高原に源を發したメコン川は、タイ・ラオス南部では川幅が14kmにも達し、原生林の中を大きく蛇行しながら森の国ラオスを1,900kmに渡って流れ、さらにカンボジアを抜けて、ベトナムから南シナ海に注がれていく。ラオスは、中国、ミャンマー、タイ、カンボジア、ベトナムの5カ国と国境を接し、日本の本州ほどの広さを持つ内陸国である。熱帯性モンスーン気候に属し、雨季(5月～9月)乾季(10月～4月)の2つのシーズンに分かれる。国土のうちの約70%が高原や山岳地帯である。ラオスの人口は612万人。(2009年現在)そのうち約10%がヴィエンチャン特別市に集中している。民族もモン族、ヤオ族、アカ族など多様性があり、その数68ともいわれ、独自の文化を育んできた。主民族ラオ族は大きく3つに別けられる。低地ラオ族(ラオルーム)は人口の70%を占め、メコン川流域へ位置に住む。丘陵地ラオ族(ラオトゥン)は人口の20%を占め、標高1,000m以上の高地に住む。高地ラオ族(ラオスーン)は人口の10%を占め、山岳地帯に住む。女性は膝丈位のスカートやズボンをはき、民族によっては、帽子をかぶっている。

ラオスが歴史に登場するのは14世紀中頃。ランサン王国(ランサンとは百万頭の象という意味)がルアンパバーンに王都を定めた頃からである。16世紀には絶頂期を迎え18世紀にはいと王位争奪の争いから、ランサン王国はヴィエンチャン、ルアンパバン、チャンパサックの3つの国に分裂するが、その後1893年フランスのインドシナ連邦に編入され、ランサン三国はラオ族のラオを複数形にしてラオスと呼ばれるようになる。その後も、右派、中立派、左派の対立による抗争と、列強の介入により拡大するベトナムの内戦に巻き込まれ、政治的混乱の時代が続いた。そして1975年12月、ラオス人民革命等の勝利により王制を廃止し、現在のラオス人民共和国を無血で樹立した。今もなお、海外からの経済援助に頼っているが、この国で暮らす人々の心は豊かさで満ちており、溢れんばかりの微笑みで、いつも私達を迎えてくれる。

首都 ヴィエンチャン

ヴィエンチャンは1560年セタティラート王によって、ビルマの侵攻から避ける為にルアンパバーンから遷都された。首都というと、誰もが喧騒と活気を想像するであろう。しかし、ここヴィエンチャンはそんな首都の要素を微塵も感じさせない。まさにメコンの恵みを肌で感じるような穏やかで、暖かく、笑顔溢れる類稀な首都である。

現在では諸外国からのビジネスマンが、今後のラオス経済発展・成長のためにせわしく出入りしている。空路・陸路共に出入国のメインゲートであり、1999年6月からは、日本政府の無償資金協力によってできたワットタイ空港新ターミナルが主に利用されている。フランス植民地時代の古い建物と並木道、そして数多くの仏教寺院が混在し、アジアと西欧文化の融合が見られる美しい街並みである。17世紀にヴィエンチャンを訪れた東インド会社の商人やイタリアの伝道師らは当時のヴィエンチャンを東南アジアでもっとも荘厳な町であると評した。



パトゥーサイ(凱旋門)



タートルアン



ワット・シーサケット

古都ルアンパバーン

毎朝、朝もやと静寂の中、サフラン色の袈裟に身を包んだ僧侶が列をなし、姿を現す。人々は、後世の幸福を願い、次々に現れる僧侶へ喜捨をする。その傍らで、朝市の準備にも余念がない。ルアンパバーンの1日は、こうして始まる。まるで絵本の中にあるような街を散策しているうちに、夕刻からメインロードは赤や青のテントで埋め尽くされ、夜の催しナイトマーケットが始まる。丁寧に作られた品々に見入り、笑いの交じる売買交渉を楽しんでいると、夜は更け、ルアンパバーンの1日が終わってゆく。

ここ、ルアンパバーンは 1995 年に世界文化遺産に登録されたが、静けさと喧騒、アジア文化とフレンチコロニアルの風合いが交じり合った街だ。ランサーン王国からルアンパバーン王国として独立したのち 1975 年までの間、ここルアンパバーンは首都として栄えていた。かつて王宮だった建物は今では国立博物館として利用され、また、カンパー王女の住まいだった家は改装され今や人気のホテルとなっている。近年、世界の名だたるインターナショナルホテルが建ち並ぶ街となったものの、それでもまだ他のアジアとは一味違った穏やかさを残す貴重な街である。市内から少し離れると、昔ながらの生活を送る人々と触れ合うことも可能だ。急速に近代化が進む中、古より続く伝統をこよなく愛し、大切にしているラオスの人々。彼らが作り出すこの空間から、我々は自然や伝統、時間の大切さを感じずにはいられない。

何をするでもなく「ただ、ここにいる。」その時間は、日本に帰ってから気づくのだろう。「なんて贅沢な時間なんだ」と。そう思ったとき、また行きたくなる。そう、何度でも訪れたい街、それがルアンパバーンなのである。



毎朝の托鉢風景



毎夜のナイトマーケット



メコンに沈む夕日